

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 金 炯辰

本論文は、近世後期における朝廷の動向を、その最大の権力者であった関白鷹司政通や知識人たちを中心に、朝廷内部の運営や江戸幕府との交渉などの政治的な問題と、文化・学術の問題、とくに復古思想を、相互に関連させて追及した論考である。

第一部では、近世後期、特に仁孝天皇の在位期（文化14〔1817〕年～弘化3〔1846〕年）の朝廷について、仁孝天皇を中心とする和漢の歴史・古典の勉強会、古代律令制の部分的な再興を名目とした幕府からの援助引き出しの試み、天皇号・漢風諡号の復活にいたる政治過程などを素材に、関係する人物や政治交渉を詳細に検討し、当該期の朝廷の政治的・文化的な動向を具体的に描き出すことに成功している。第二部では、当時の朝廷と幕府の間で行われた儀礼や交渉を素材に、交渉担当者や武家側の知識人の言説を分析し、朝廷における復古理念のあり方や、朝幕関係についての武家側の姿勢やまなざしを具体的に追及、当該期の特徴を論じている。

本論文の研究史上の意義は次の諸点にある。第一に、重要な二つの時期に挟まれながら、史料的制約が大きく研究が進んでいなかった当該期について史料を博搜し、特に儀礼・学芸に関連する史料群を活用することで、政治的な動向についても実態解明を成し遂げたことである。一見政治と縁遠く、形式的で煩瑣と思われがちな史料群に注目、膨大な量を本格的に分析し、重要な諸事実を発掘した着眼と努力は高く評価されるものである。第二に、こうした取り組みにより、鷹司政通の政治的な動向と理念を具体的に浮き彫りにしたことである。政通は長年朝廷に君臨した権力者で、晩年にあたる幕末期には、国政の重要な転機となった条約勅許問題において大きな役割を果たしており、ここに通時的な把握への見通しがつけられたことが重要である。第三に、近世朝廷において「再興」「復古」の理念が一貫して掲げられたことは従来知られていたが、当該期における具体像を様々な言説から分析、特に古代律令制や、中国の古典古代をも理想としたことを、具体的な参照のされ方とともに示し、また政治との関わりを論じたことである。第四に、在野の学者である古義堂伊藤家など、朝廷の外部とみえる学問・思想の担い手と朝廷の関係について具体的に解明し、やや個別細分化しつつある天皇・朝廷研究と、近年研究の意義がますます高まっている文化・思想史研究を結び付け、蓄積を相互に活かす道筋を示したことである。

特定の時期・主体の分析に注力したため、前後の時期との比較による特質の検証が展望にとどまる点、また幕府・武家側の検討については概して問題提起の段階より脱していない点など、残された課題はあるものの、それは本論文が研究史上に持つ価値をいささかも減ずるものではないと考える。よって、本委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断する。